

座長／前・国立スポーツ科学センタースポーツメディカルセンター／奥脇 透
／札幌医科大学医学部整形外科学講座／寺本篤史

2022年2月4日から20日までの17日間、北京で開催された第24回オリンピック冬季競技大会（北京2022）は、COVID-19パンデミック以後、初めて日本選手団が海外派遣された国際大会となった。東京2020の経験を踏まえながらも、北京2022の厳格なレギュレーションの中で、選手・スタッフとも安全に渡航し、大会への出場と十分なパフォーマンスを発揮するためには、相当な準備と対策が必要であった。そのため、メディカルの責務は非常に大きなものとなり、当然のことながらCOVID-19以外の疾病や外傷・障害への対応も必要であったため、過去大会とは異なる準備が求められた。本シンポジウムでは、現地に派遣され、様々な立場でご活躍された5名の先生をシンポジストとしてお招きし、順番にご講演していただいた後に総合討論を行った。

慶應義塾大学の石田浩之先生は、日本選手団本部チーフドクターの立場から「日本選手団におけるメディカルサポート—COVID-19への対応と経験—」というタイトルでご講演された。冬季大会の特徴である、氷上系競技と雪上系競技が離れて行われることに対して、本部メディカルスタッフも2カ所に分かれて活動し、その具体的な医学サポートについて報告された。COVID-19への対応としては、Closed Loop方式や選手村入村の手続き、大会期間中のPCR検査や隔離基準についてなどの詳細な説明がなされた。十分な感染対策の結果、日本選手団においてCOVID-19のため競技に出場できなかった選手はおらず、大会の成功に繋がったことが報告された。

東京医科歯科大学の柳下和慶先生は、日本スケート連盟ドクターの立場から「北京冬季オリンピックにおけるスピードスケートの医学サポート」というタイトルでご講演された。北京2022前のワールドカップや事前合宿におけるCOVID-19対策について説明された。COVID-19以外に、スピードスケート競技での疾病や外傷・障害の特徴を説明され、コンディショニングにおけるトレーナーの重要性を強調された。大会期間中のドーピング検査や選手・スタッフのメンタルケアの必要性についても話された。

山手クリニックの服部幹彦先生は、日本アイスホッケー連盟ドクターの立場から「北京オリンピック・女子アイスホッケー競技におけるメディカルサポートの報告」というタイトルでご講演された。団体競技のため、クラスター対策の必要性とその実際を説明された。また、チーム全体としてフィジカルの強化に取り組んだ結果、外傷の予防に繋がったことが報告された。障害では末梢神経障害の発生が多く、超音波検査機器を用いてのハイドロリリースが効果的であったことを報告され、具体的な症例提示がなされた。

国立スポーツ科学センターの鈴木章先生は、トレーナーの立場から「北京2022大会におけるハイパフォーマンスサポート事業」というタイトルでご講演された。オリンピックにおけるハイパフォーマンスサポート事業の仕組みについて動画で詳しく説明された。村外サポート拠点と村内支援について、北京、張家口それぞれの選手村における設備とサポート機能を詳細にまとめられていた。パラリンピックも含めて活動実績を統計的に報告していただいた。

日本女子体育大学の湯田淳先生は、日本スケート連盟スピードスケート監督の立場から「スピードスケートにおけるメディカルサポートの重要性」というタイトルでご講演された。競技力向上のためにナショナルチーム体制を構築し、国際化を図りながら選手強化を行っていったことが説明された。ナショナルチームの中で、メディカルスタッフも継続したサポート体制をとり、チーム内の情報共有を積極的にとって組織力を高めていくことが大事であることを話された。強化体制の中でメディカルに求める3つの要因は、優れた専門スキル、実行力、協働性とのことであった。

総合討論では、改めてCOVID-19の対策についてそれぞれの立場から説明していただいた。行動制限の中でも、選手・スタッフとのコミュニケーションが良好に進み、得られたものは大きかったと感じられた。また、選手村医務室に超音波検査機器を持ち込んだことにより、診断・治療が迅速に行えたことは非常に

有効であった。本大会は冬季オリンピック史上最多 18 個のメダルを獲得し、メディカルも選手の大活躍の一助になったと考えられる。2026 年ミラノコルティナ大会に向けて、医学サポート体制をより充実させていきたいとまとめて本シンポジウムを終えた。